

いつも主に仕える特権

2010年2月23日(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ダニエル書 6章20節

その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

先週に続いて、このダニエルの信仰と、またダニエルの妥協なしの証しについて少し考えたいと思います。

当時の王は、「生ける神」という表現を使ったのです。ダニエルの神は「生きておられるお方」であり、「支配なさるお方」である、と確信するようになりました。

「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」あり得ないことが可能になったのか、と。

ダニエルのように獅子の穴にいるとき、また真っ暗な闇の中で悪魔が勝利を握っているかのように思われるどん底に陥ったときこそ、最も素晴らしく主のご栄光を拝することができます。主は私たちを、ダニエルのように少しの妥協もすることなく、ひたすらに主に仕えて、奇跡を経験する人にしたいのではないのでしょうか。

ダニエルは本当に素晴らしい祝福をいただきました。全く恵まれていない状況でしたが、彼はその出来事を主の御手から受け取ったので、大いに恵まれました。しかしそれを見た多くの人々は、あまり良い気持ちを持っていなかったでしょう。そのように大いに用いられると、やはり多くの妬む人々が次々と出てきました。何とかしてダニエルを失脚させようとする人々が出てきたのです。妬む人々は、手段を選ばず、ダニエルを失脚させようりましたが、結局上手くいかなかったのです。なぜかと言いますと、ダニエルには隙がなかったからです。彼は、熱心にまじめに怠ることなく務めを全うしたからです。言うまでもなく、人間を喜ばせるためではなく、主に仕えるためでした。

悪魔は、ダニエルに敵対する人々を用いたのです。悪魔はいつも人間を用いるのです。主と同じです。主も人間を用いようと望んでおられます。ダニエルを妬む人々は確かに思ったでしょう。「彼はユダヤ人だ。いわゆる特別に選ばれた民に属する者だ。そして生きている神、唯一の神を拝している者だ。毎日、生ける神を拝んでいるその者。彼を駄目にするために今の状況ではどうすることもできない...」ですから、新しい法律をもうけようとしたのです。

ダニエル書 6章6節から9節

それで、この大臣と太守たちは申し合わせて王のもとに来てこう言った。「ダリヨス王。永遠に生きられますように。国中の大臣、長官、太守、顧問、総督はみな、王が一つの法令を制定し、禁令として実施して下さることに同意しました。すなわち今から三十日間、王よ、あなた以外に、いかなる神にも人にも、祈願をする者はだれでも、獅子の穴に投げ込まれると。王よ。今、その禁令を制定し、変更されることのないようにその文書に署名し、取り消しのできないメディアとペルシヤの法律のようにしてください。」そこで、ダリヨス王はその禁令の文書に署名した。

王はうまく騙された気の毒な男です。彼はもちろん主を知らなかったし、頼ろうとしなかったし、助けを求めもしなかったので、騙されました。これに対してダニエルの態度は素晴らしかったのです。

ダニエル書 6章10節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

ここでアンダーラインすべきことは、「いつものように」という言葉です。たまに、ではありません。「いつものように」、です。結局言えることは、このダニエルは主のみこころをたずね求める人でした。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」と。生けるまことの神は自分の祈りに応えてくださると、彼は何度も何度も、何十年間も、経験していました。ですから自分の身に危険を及ぼす計画を知ったとき、「祈ろう」「主に委ねよう」「主に任せよう」という態度をとったのです。ですから、思い煩いをすべて主に委ねました。彼を妬む人々は、ダニエルが主に祈ることを知っていましたので、「王以外のものを持つんではならない」と、そのための法律を作ったのです。そして、ダニエルが祈っているところ、即ち人間によって作られた法律を破っているところを見つけました。彼らは嬉しかったでしょう。「今度はもうアウトだ」と。

ダニエルはどうしてこの態度をとったかと言いますと、「隠れた信者でいるよりは死んだほうがまだ」と考えたからです。全く人間を恐れなかったのです。主を畏れたからです。身の危険を覚えて、高い地位を捨てて簡単に逃げることはできたはずですが。窓を全部閉めて、押入れ（あったかどうか分かりませんが、そのようなところもあったはずですが）のその中で、声を出さずにただ心の中で祈ったなら、誰も気がつかなかったでしょう。しかし彼はそのようにしませんでした。自分の命はどうなっても良い、と。自分の命を軽く見たのでしょうか。決して決してそうではありません。私の生けるまことの神は「悩んでいる人々を救おう」「束縛されている人々を解放しよう」としておられると、彼は確信したからです。今話しましたように、ダニエルは「隠れた信者にはならない」と固く心に決めたのです。彼は、公に祈り、公に証しし、人の誉れを少しも望みませんでした。妬む人々は、

祈っているダニエルを見つけました。自分たちの定めた法律を破ると言って、ダニエルを訴え出しました。あのユダヤ人を無力にしておもう。そのような気持ちでいっぱいだったのです。

先日話しましたように、分かることは、その夜ダニエルは獅子の穴の中で寝たということです。ぐっすり寝ました。使徒行伝の中に似ている箇所があります。ペテロは次の日に殺されそうになったとき、彼も寝ました。ぐっすり…。生けるまことの神とはそのようなお方です。

ダニエル書 6章18節

王は宮殿に帰り、一晩中断食をして、食事を持って来させなかった。また、眠けも催さなかった。

ダニエルは寝た。王は眠れなかった。

このダニエルは、異邦の国に住んでいました。そして、異邦の教育を受けました。しかし、まことの神を畏れる恐れは、ダニエルに異邦のものと妥協することを避ける勇気と力を与えたのです。ダニエルは、王に喜ばれようとは一度も思ったことはありませんでした。ただ主だけをお喜ばせしようと切に望んだのです。言えることは、主を畏れる恐れから、彼は主のみことばを破ることを恐れしました。「自分はどうでも良い。しかし妥協しません」と。

ダニエルの態度を見ていきますと、私たちは常に主に仕えようとするには確かに勇気が必要です。この勇気は、もちろん金で買えるものではありません。祈りによってのみ与えられます。「知恵と理解力」、「主の奥義を知る力」も、祈りによってのみ生まれてくるものであることを、ダニエルは何度も経験しました。ダニエルは祈りのうちに夢の解き明かしを教えられました。常に、絶え間なく主に仕える者には、「主の奥義」が現わされてきます。ダニエルは何歳になっていたのか分かりませんが、その間に世界の支配者たちは次々と変わったのです。しかしダニエルだけは変わりませんでした。今日はこう、明日はそのようにと、環境によって行き先を変えるようなことは、ダニエルにはできなかったのです。常に主に仕えていました。主のご栄光を現わしていくことが、ダニエルの持っていた唯一の目的でした。「自分はどうでも良い。何があっても主に用いていただきたい」、これこそが彼の切なる願いでした。

多くの人は、目的のためには手段を選ばずで、目的にさえ到達できれば少しくらい妥協しても方法はどうでも良いと考えますが、そのようなことは彼にはできなかったのです。その結果が何であるかと言いますと、彼は用いられました。日々主の御声を聞き、それに従っていくことだけが大切なのではないでしょうか。結果がどうであろうと、たとえ悪くても、主が責任を取ってくださるのです。ダニエルは絶えず主にだけ仕えていきました。ですから、結果を恐れなかったのです。

こんにち主が求めておられるのは、ダニエルのような兄弟姉妹ではないでしょうか。即ち、常に主に仕え続ける人々を求めておられます。私たちの命をかけて仕えて行く価値のある主が、ダニエルの神だけではなく、私たちの主でもあられます。ダニエルはそんなにも深く、心から主をあがめていましたので、主を裏切るよりは獅子の穴に投げ込まれたほうがましだ、と思ったのです。この事実から学ばせられることは、ダニエルは常に主にだけ仕えようと望んだのです。ですから、常に主に仕え、自分の命を捧げても惜しくないというダニエルは思ったのです。

私たちにとって、主は、命を捧げても悔いもないほど、価値あるお方なのではないでしょうか。主を知るようになった兄弟姉妹は、次のように証します。私たちが罪人であったとき、主がまず私たちを愛してくださった。大いなる恵みにより、私たちの罪を赦してくださった。主は、私たちを絶望の穴から固い岩の上に救い出してくださった、と。

私たちのしもべとなり、私たちを救ってくださった主は、私たちが地上で生きるわずかな間も、あらゆる試みから守ってくださると約束しておられます。私たちもこの主のために、残るわずかなときを常に仕えていきたいと、多くの人々は証しています。では主は私たちにとってどのような価値があるお方なのではないでしょうか。

ホセア書の中でちょっと驚くべきことばが書かれています。
ホセア書 5章12節

わたしは、エフライムには、しみのように、ユダの家には、腐れのようになる。

選ばれた民、主の恵みにあずかるようになった民が、主を大切にしようとしなかったということです。

「イエス様が私たちのいのちとなっているかどうか」ということが、大切なのではないのでしょうか。私たちはダニエルのようにひたすらに主を愛し、主に仕えようと思っているのでしょうか。或いは、私たちは自分の名誉や立場を考え、妥協してうまく通り抜けようとするのでしょうか。それとも、ひたすら主にだけ仕えようとしているのでしょうか。もし主の御名のゆえに苦しい目に会うなら、それを喜びとするのでしょうか。

主に絶えず仕えることは私たちの喜びであると、心から言い表わすのを主は待っておられます。

このダニエル書を通して何を知ることができるかと言いますと、ダニエルの神は、「ダニエルを守ることがおできになった。」「ダニエルを獅子の穴から救い得る主である」ということです。

ダニエル書 6章19節、20節

王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

もう一箇所読みましょう。ここは別の獅子についての箇所です。「吠えたける獅子である悪魔」についての箇所です。ペテロが、迫害され非常に悩んでいた兄弟姉妹を励ますために書いたことばです。

ペテロの手紙・第一 5章7節から11節

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、吠えたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。どうか、神のご支配が世々限りなくありますように。アーメン。

当時の兄弟姉妹は手紙を読んだとき、嬉しくなったのではないのでしょうか。「主は生きておられる。委ねましょう。主は勝利者です」と。

ダニエルの神はこんにちでも私たちが獅子の穴から救うことができになるのだろうか、と疑っている人がいるのかもしれない。目に見える獅子はあまり私たちが襲いませんが、目に見えない悪魔は吠えたける獅子のように私たちを取り巻き襲ってきます。ダニエルと一緒に寝た獅子は、張り子の獅子ではなかったのです。生きていた猛獣でした。この私たちを取り巻く悪魔の攻撃、試み、戦いは架空のものではありません。恐るべき現実です。もし主が守ってくださらなかったなら、ダニエルは獅子に喰い裂かれたことでしょう。同じように、主が私たちを守ってくださらなければ、私たちは恐るべき悪霊の攻撃に遭い、絶望し、間違った方向に導かれていくことでしょう。

ダビデ王の体験はどうだったでしょうか。詩篇57篇を読むと、次のように書かれています。

詩篇 57篇4節

私は、獅子の中にいます。私は、人の子らをむさぼり食う者の中で横になっています。彼らの歯は、槍と矢、彼らの舌は鋭い剣です。

7節

神よ。私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません。私は歌い、ほめ歌を歌いましょう。

ダビデ王は憎しみのただ中、むさぼり食らう獅子の中に身を横たえていました。しかしついに、7節のように勝利の叫びを上げることができました。たぶんあなたにとってあなたの家族は獅子の穴のようかもしれません。あなたは家にいるとき、イエス様の御名のゆえに平和と一致がなく、居にくいかもしれません。いったいどうしてでしょうか。イエス様の答えは、驚くべき答えです。多くの質問に対する答えではないでしょうか。

マタイの福音書 10章34節から39節

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。」

イエス様の一つのお名前は「平和の君」です。

自分の家族は獅子の穴のようなものであるかもしれません。或いは、自分の職場は獅子の穴のようかもしれません。しかしダニエルのように妥協せずに、職場にあっても仕えて行くなら本当に幸いです。もし悪魔がこのダニエル書6章20節のようにあなたにささやいてきたら、どう答えますか。即ち、「あなたがいつも仕えている神が獅子の穴から救うことができるか」と。次のように答えてください。「はい、主はおできになると信じています。主は救いたいのです。たとえ主が獅子の穴から救い出されなくても、栄光のかなたに引き上げてくださいます」と。

他の獅子の穴について、聖書はいろいろなことを述べています。

・その一つは、ヘブル書11章です。当時の兄弟姉妹は何と何を経験したかについての、まとめのようなものではないでしょうか。

ヘブル人への手紙 11章33節から39節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しく

なり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。荒野^{あらの}と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束^{やくそく}されたものは得ませんでした。

今読みました箇所を見ると、今まで主の御名のゆえに殺された多くの何千、何万人という人々について書かれている彼らの経験したことは、まさに獅子の穴そのものです。彼らは拷問^{ごうもん}の苦しみに甘んじ、少しの妥協もせず、常に主に仕えていました。これらの人々にダニエル書6章20節を質^{ちが}してみると、何と答えるでしょう。彼らは必ずローマ書8章37節のように答えるに違いありません。

ローマ人への手紙 8章37節

しかし、私たちは、私たちが愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあって、圧倒^{あつどうてき}的な勝利者^{しょうりしや}となるのです。

・病^{びょうき}気も一つの獅子の穴ではないでしょうか。多くの主にある兄弟姉妹は病に倒れ、数週間、数箇月^{すうかげつ}、数年間、床の上に寝たきりで良くなる望みのない闘病^{とうびょうせいかつ}生活を続けています。これらの人々にはこの世の望みは何もありません。このような人々は孤独^{こどく}です。しかし、主はそれらの兄弟姉妹の喜びであり、また拠りどころとなっています。これらの兄弟姉妹にダニエル書6章20節を尋ねると何と答えるでしょうか。おそらくダビデのように答えるのではないかと思います。

詩篇 103篇1節から5節

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖^{せい}なる御名^{みな}をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くして下さったことを何一つ^{なにひと}忘れるな。主は、あなたのすべての咎^{とが}を赦^{ゆる}し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖^{あがな}い、あなたに、恵みとあわれみとの冠^{かんむり}をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

『主の良くして下さったことを何一つ忘れるな。』提案^{ていあん}ではなく、命令^{めいれい}です。

・もう一つの穴があります。即ち、「死」という獅子の穴です。何と多くの主を信じる者が、既にこの穴を通して行ったことでしょう。彼らが死を克服^{こくふく}したイエス様を知るようになり、その結果、彼らの死ぬ寸前^{すんぜん}、彼らにその心を問うなら、何と答えるのでしょうか。いわゆるよみがえりの書コリント第一の手紙15章の中で、次のように書かれています。

コリント人への手紙・第一 15章54節後半から57節

「死は勝利にのまれた。」とするされている、みことばが実現^{じつげん}します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法^{りっぽう}です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

私のひいおばあさんが死ぬとき、その部屋は真っ暗でした。けれど死ぬ寸前、ひいおばあさんの顔は昼の日のように明るくなり、主のご栄光が見えると言って死にました。この死に方を見た私の母は、結果として、イエス様を知るようになり、信じるようになったのです。私の卒業したスイスのベアテンベルクの神学校の校長先生が召されるときも、素晴らしい光景でした。召されるとき彼は何と言ったかと言いますと、「私は御顔を、御声を聞くことができる。主が見える。罪の赦しは栄光の冠だ」と言って息を引き取ったということです。やがてイエス様が来られるとき、すべての御名のゆえに殺された人々、病で死んだ兄弟姉妹、迫害されて死んだ信じる者はみな、獅子の穴から引き上げられ、よみがえらせられ、主のみもとで大いに喜ぶようになります。

昨日ちょっと千葉まで行きました。M姉妹の前夜祈禱式だったのです。四箇月半、戦いの連続でした。彼女は市川集会の姉妹で、イエス様を心から愛した姉妹でした。控え目で、全く自立たない姉妹でした。そして、ご主人もこの病気を通して導かれました。昨夜の彼の証しは誰も忘れられないと思います。彼は言いました。「私は、今喜んでいきます。嬉しい！イエス様のみことばこそ私の力となりました。イエス様に感謝しています。びっくりしないでください。嬉しい涙です」と。姉妹の最後のことばは、「私は、息子たちをイエス様にお返しいたします。すべて委ねます。イエス様に感謝します。私は幸せです。あなたのみこころを感謝します」。それが彼女の最後のことばでした。ご主人は、「家内は一瞬の間に天国に引き上げられました。彼女の眼が笑いましたよ」と言いました。そのような証しを聞くとき、本当にダニエルの神は私たちの神だ。主はこんにちも働いておられる、と確信するのです。

静岡県の一の兄弟はある冊子を書きました。題名は『人生の勝利者』です。良い題名です。今話しましたM姉妹も、人生の勝利者でした。

「勝利」とは何でしょうか。

・「罪の問題の解決」です。M姉妹も、「私の過ち、わがまは赦されているだけでなく、忘れられています」と。また勝利は「孤独からの解放」です。さびしくても決してひとりぼっちではありません。イエス様はいつもついておられます。イエス様は決して私から離れず私を捨てませんという確信こそ、勝利者の特徴です。

・もう一つの勝利とは、「死を恐れる恐怖からの解放」です。コリント第一の手紙の中で、いわゆる携拳、空中再臨について書かれています。この間も、どなたかから聞きました。確かめました。ある兄弟は以前、みことばを宣べ伝えた兄弟だったのですが、彼は、空中再臨を信じません、と。何を言ったらいいかちょっと分かりません。しかし、聖書ははっきり語っているのです。空中再臨の一番大切な箇所を読みます。

まず、

コリント人への手紙・第一 15章51節、52節

聞きなさい。私はあなたがたに^{おくぎ}奥義を^つ告げましょう。私たちはみな^{ねむ}が眠ってしまうのではなく、みな^あえられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、^{いっしゆん}一瞬のうちにです。ラッパが^な鳴ると、死者は^{ししや}朽ちないものによみがえり、私たちは^あえられるのです。

『聞きなさい』、聖書は大切なことを^{きやうちやう}強調するとき、いつも「聞きなさい」と。^あ或いは『見なさい。見よ。』ということばを使っているのです。「みな^{ねむ}が眠ってしまうのではなく」、肉体的に死んでしまうのではなく、です。「^{いっしゆん}一瞬のうちに」、一秒もかからないうちに、です。「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは^あえられるのです」、空中再臨とはそのことです。死者は朽ちないものによみがえり、まだ生きている者は^あえられるのです。

もう一箇所、

テサロニケ人への手紙・第一 4章13節から18節

^{ねむ}眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の^{のぞ}望みのない人々のように^{しづ}悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで^{ふた}復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて^{ねむ}眠った人々をイエスといっしょに^つ連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が^{ふた}再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に^{ゆう}優先するようなことは決してありません。主は、号令と、^{みつ}御使いのかしらの声と、神のラッパの^{ひび}響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に^{いっきよ}一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに^{なぐさ}慰め^あ合いなさい。

と記されています。

今の箇所で、「終わりのラッパ」という表現が出てきました。テサロニケ4章の中で、「神のラッパ」という表現が出てきます。「眠った人々」とは、先に死んだ人々のことです。

ダニエルは主にだけ仕えたいと思ったのです。ですから豊かな祝福を得ることができたのです。ダニエルの^{とくちやう}特徴は、幼子のような信仰、定まった心、目の前に一つのはっきりとした目標を持っていたことでした。

この「主の再臨」について、「終わりのラッパ」「神のラッパ」について、いつも、既に天に召された一人の姉妹のことを考えるようになります。I 姉妹の家で初めて会いました。姉妹は、いろいろなことがあったのです。^{じゅうびやうにん}重病^に人になりました。手足は使えません。話すこともできません。聞くこともできなくなりました。状態の^{じやうたい}良い日もあったし、悪い日もありました。良い日には、彼女は指一本一ミリくらい動かすことができました。(今

はコンピューターがあるから、コンピューターと繋げれば言いたいことが言えるのですが、)見舞に行くとき(春日部から行ったのですが) 何時間か前に「行きますから」と電話しなければならなかったのです。状態の良い日でしたら、ちょっと何か文章を書くことができたのです。あるとき彼女の書いた文章は、次のようなものでした。

痛みのかたまりです。だから、いつも祈っています。耳も聞こえないし、食べることもできず、ラッパの音を待つばかり。早く駆け足で迎えに来てください。再臨、近いものと首を長くしております。

良いでしょう。「ダニエルの神」が生きておられる証拠ではないでしょうか。不平不満を言わないですよ。面倒をみている娘さんの姉妹は、「まだ何年間も喜んで主に仕えます」と。病院は何の手だてもできなかったのです。医者はお手上げ。ですからずっと娘の家で面倒をみてもらっていたのです。娘はもちろん御代田まで行けないし、家庭集會にも行けないし、走って走って買い物をして戻らないと、どういうことになるか分からない。しかし、彼女は、「喜んで何年間も主に仕えたい」と言ったのです。これも普通ではないことです。「ダニエルの神は生きておられる」証拠です。

少しの妥協もすることのないダニエルの信仰は、素晴らしい影響を周囲に及ぼしました。当時の異邦人である王が書いた証しがあるのです。もう一度ダニエル書6章に戻って終わります。彼は、「ダニエルの神」と言って、主をほめたたえました。王は自ら、「ダニエルの神」を知りたいという飢え渴きを持ただけではありません。この主を知るようになりました。当時の全世界に詔を書き送って、ダニエルの神を畏れるように命令しました。ダニエル書 6章25節から27節

そのとき、ダリヨス王は、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに次のように書き送った。「あなたがたに平安が豊かにあるように。私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

ダニエルを妬んで迫害した人々が穴に投げ入れられたとき、その人たちだけでなく、妻も子も神に逆らって死んだとあります。

もし今日、私たちが新しく主にすべてを捧げ、特に私たちの意思を主に捧げて仕えるなら、私たちの家族も救いに入るようになります。だからこそ、心から主に仕える者になりたいのではないのでしょうか。

了